

漁業資源対策研究調査

池脇義弘・守岡佐保

本調査では、これまで水産研究所が様々な事業で実施した、小型機船底びき網漁業（以下、小底と記す）の標本船日誌調査、ならびに、主要漁協の漁獲統計調査の結果をデータベース化し解析することにより、本県漁業が漁獲対象とする資源の動向、資源状態の将来予測などをおこなうことを目的としている。

今年度は、紀伊水道において小底が営まれている主要な漁協である徳島市漁協および椿泊漁協の漁獲統計データが、10年分蓄積されたので、主要な漁獲対象種について、

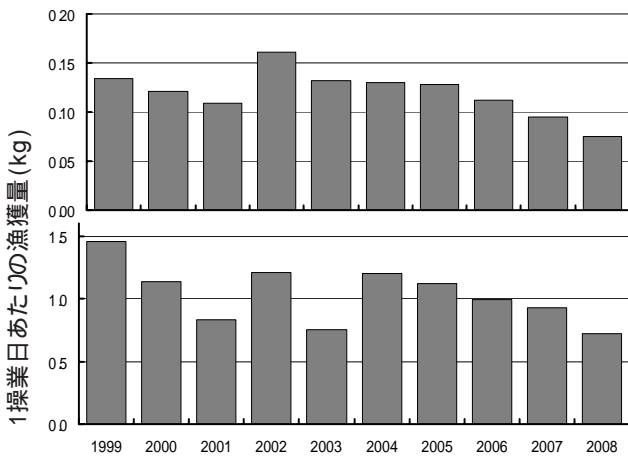


図1 小底によるクルマエビの漁獲量変動
(上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協)

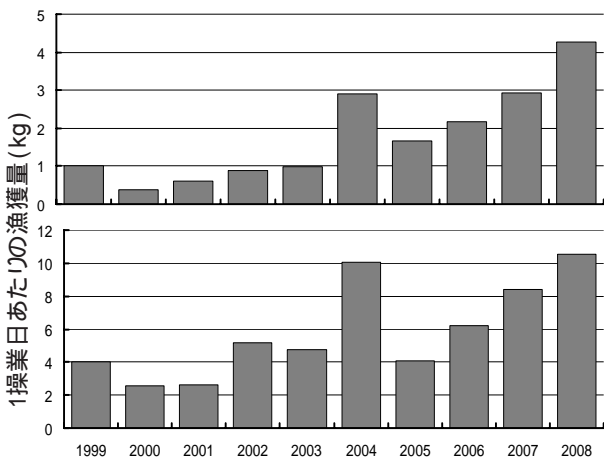


図2 小底によるクマエビの漁獲量変動
(上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協)

その漁獲量変動を調査した。

図1～3にクルマエビ、クマエビおよびヨシエビの漁獲変動を示した。クルマエビ、ヨシエビは減少傾向であった。とくにクルマエビは、農林統計によれば1980年代から漁獲減少傾向が続いており資源状態の悪化が懸念される。一方、クマエビは増加傾向を示し、クルマエビの変動と対照的であったが、これには、両種の種間競争の影響や近年の水温上昇傾向の影響などが考えられる。

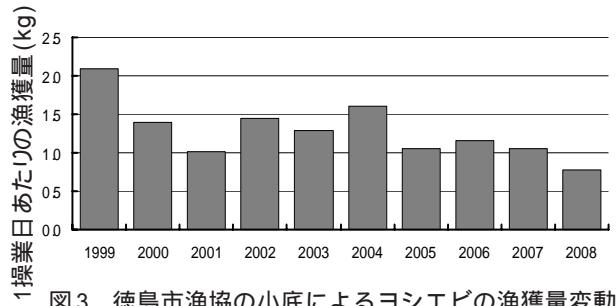


図3 徳島市漁協の小底によるヨシエビの漁獲量変動

図4に徳島市漁協におけるガザミおよびジャノメガザミの漁獲変動を示した。両種ともにガザミ類の特徴である顕著な年変動が見られた。とくに、ガザミ類は2005年以降、ジャノメガザミは2004年以降、ともに漁獲量が激減しており、ガザミ類資源にとって何らかの環境悪化が起こっている可能性が考えられる。

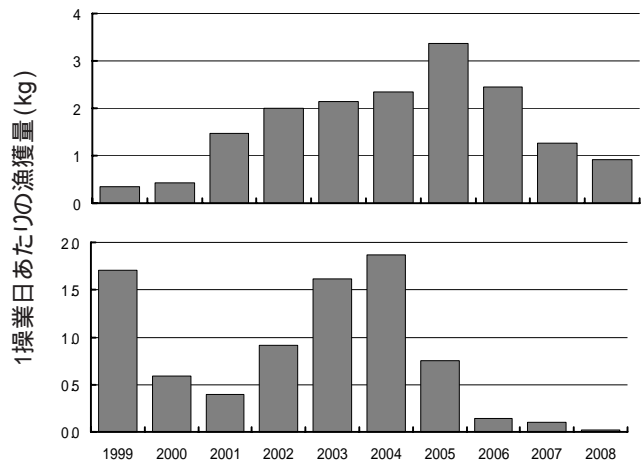


図4 徳島市漁協の小底によるガザミ類の漁獲量変動
(上図：ガザミ、下図：ジャノメガザミ)

そのほか年変動が激しい魚種としてイボダイがあげられる(図5)が、変動の要因は特定できなかった。

ハモは、1999年以降卓越年級群が発生し2001年にかけて漁獲量が急増したが、椿泊漁協では変動しながらも高水準の漁獲量を維持している(図6)のに対して、徳島市漁協では2002年以降の漁獲量はそれほど多くなかった(図6)。椿泊漁協の漁獲変動から、ハモ資源は現在も高水準と思われるが、単価の低迷などの影響が、徳島市漁協ではハモ狙いの操業が少なくなったことが漁協間の変動傾向の違いに現れた可能性が考えられる。

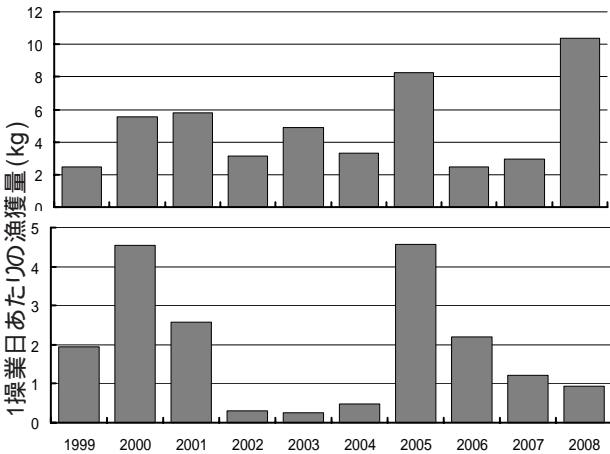


図5 小底によるイボダイの漁獲量変動
(上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協)

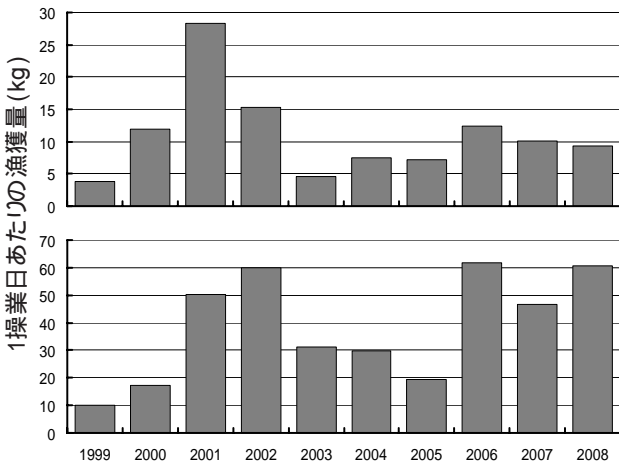
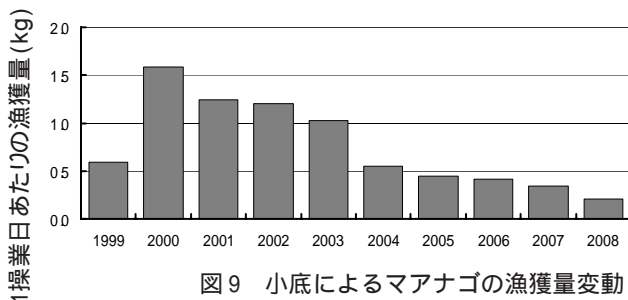


図6 小底によるハモの漁獲量変動
(上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協)



ハモと並び漁獲量が多い魚種であるタチウオの漁獲量は、最近10年間は減少傾向を示した(図7)。ハモの漁獲増に伴い、タチウオ狙いの操業そのものが減少したことも考えられるが、両漁協とも同様の傾向を示しており、資源状態が悪化したことが懸念される。

近年減少傾向が継続している魚種としては、シャコとマアナゴがあげられる(図8,9)。両種ともに沿岸域で巣穴を作って生活するが、同じ生態的特徴を持つハモ資源の増加により(種間競争の影響で)資源状態が悪化した可能性が考えられる。

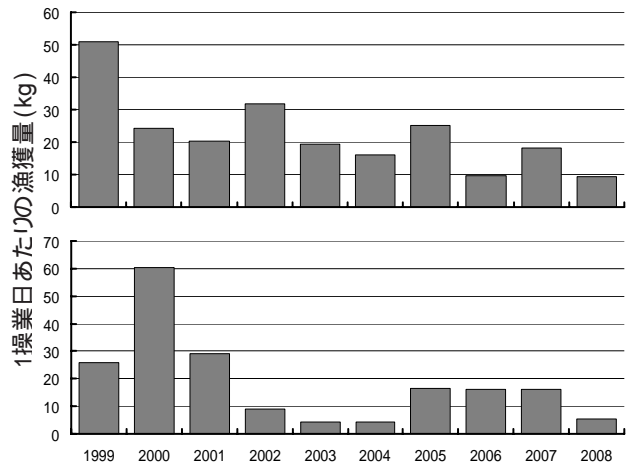


図7 小底によるタチウオの漁獲量変動
(上図：徳島市漁協、下図：椿泊漁協)

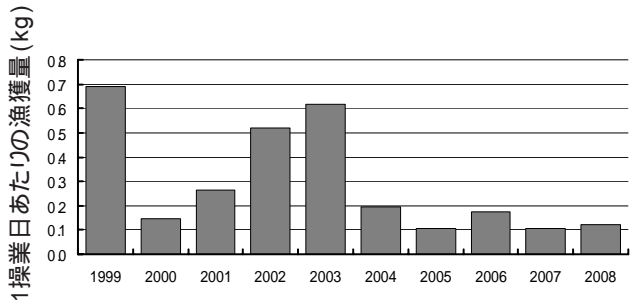


図8 徳島市漁協の小底によるシャコの漁獲量変動

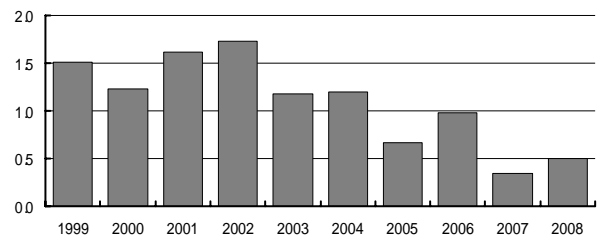


図9 小底によるマアナゴの漁獲量変動(右図：徳島市漁協、左図：椿泊漁協)